

既成市街地の住宅地計画における景観配慮に関する 基礎的研究

大路, 宗義

<https://doi.org/10.11501/3181894>

出版情報：九州芸術工科大学, 2000, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

結び

われわれの価値観や生活様式の大きな変化と共に、近年、よりよい生活環境をつくりたいとする機運が急速にたかまってきている。よりよい生活環境をつくるにあたっては、よりよい住宅地をつくること、人々が身近な生活の質を評価する点から重要である。一方、生活環境に対する居住者の満足感の低下や居留意欲の沈滞化といった地域住民の居住性に係わる課題が顕在化してきている。よりよい住宅地をつくるためには、また、地域住民の居住性に係わる課題を解消するためには、住宅地計画における景観配慮がより合理的でより効果的に展開されることが望まれる。

住宅地計画における従来の景観配慮に対する取り組みをふまえて、景観配慮の合理的で効果的な展開に必要な事項の検討にあたって、その問題の所在を探ると、われわれは、景観配慮について限られた知識と経験しかもっていないこと、思いつきや経験から得られたものよりもっと優れた何ものかが要求されること、景観配慮のよりしっかりした枠組みや体系を確立せねばならないことなどが挙げられよう。

以上の問題解決のためのアプローチについては、より科学的アプローチをとる必要があると考える。そのためには、新たな知見の把握が必要であると共に、すでに、いろいろ解明されている基礎的知見が十分に把握・活用されていないのではないかと考えられる諸点を改善していく必要がある。また、景観配慮は、土地利用や交通配慮とはっきり区別できるものではないが、それらとは別のものであり、景観配慮は、より専門的アプローチをとる必要があると考える。さらに、景観配慮は、プログラムとして展開することが必要であろう。

このような問題解決の考え方を基調とし、具体的には、住宅地計画における景観配慮の合理的で効果的な展開に必要な事項を検討するための手がかりは、現行の都市政策ビジョンが示す住宅地計画の位置づけから、これからの住宅地計画は、郊外部における新市街地整備等の役割を持つものではなく、既成市街地の再構築を推進する観点での住宅地計画であり、そして、環境問題、景観形成など新たな潮流への対応を特に重要な視点とすべきであることが認識できる。また、よりよい住宅地をつくるためには、従来の提供者の個別の視点ではなく、居住者の総合的な視点から豊かさが実感できる生活環境を形成する計画への転換が重要であると考えられる。これらのことから、住宅地計画の目標は、居住者の視点での優れた居住性の追求であると考えた。

この住宅地計画の目標から、本研究では、居住者の視点での優れた居住性を支える住宅地計画における景観配慮に関する基礎的示唆の把握を研究目的とした。具体的には、既往研究や住宅地計画の変遷からみた研究課題に対応して、住宅地の景観形成実態の違いからみた景観配慮事項の検討、環境共生の住宅地のための居住性からみた景観配慮事項の検討、景観配慮事項展開のためのプログラムの提案を研究目的とした。研究方法としては、研究目的に対応するスタディエリアの選定、景観場

面という考え方の提案と共に、アンケート調査を実施した。

その結果、居住者の視点での優れた居住性を支える住宅地計画における景観配慮に関する多くの基礎的示唆を得ることができた。すなわち、第1に、住宅地の景観形成実態の違いからみた景観配慮事項に関する知見として、満足度からみた景観配慮事項、住宅地計画プロセスにおける景観配慮の位置づけ、住宅地計画の目標実現に向けての望ましい景観の質を支える諸指標の有効性を得た。

第2に、環境共生の住宅地のための居住性からみた景観配慮事項に関する知見として、優れた居住性を創出する視点からの環境共生の意義、用途地域別での居住性からみた景観配慮事項を得た。第3に、景観配慮事項展開のためのプログラムを明確化し、その必要性などを提案した。これらのことから、本研究では、現時点でのより合理的でより効果的な住宅地計画における景観配慮に関する多くの示唆を得ることができたと考えている。

本研究で得られた成果をより発展させるために、今後、進めるべき研究課題としては、次の諸点が考えられる。

本研究が対象とする住宅地計画は、既成市街地の再構築を推進する観点での住宅地計画であり、また、環境問題、景観形成など新たな潮流への対応を特に重要な視点として、3地区をスタディエリアとして選び、検討してきたが、本研究で得られた知見をより明確にするためには、より多くの適切なスタディエリアの選定と分析方法の検討などが求められる。

また、望ましい景観の質についての諸指標が把握されたが、これからの居住者の価値観の変化や社会情勢の変化などを配慮した景観の質についての指標の捉え方などについては、長い時間的展望の中で再検討が必要となることも課題である。

景観配慮事項を明文化するプログラムを作成することにより、景観配慮上の多くの可能性が考えられるが、本研究は、プログラムの中で景観配慮事項を明文化するよりどこを示すにとどまるものである。プログラム作成による景観配慮上の多くの可能性を保証していくこと、例えば、完成した住宅地での景観のモニタリングをどうするかなどは、今後の課題である。

本研究は、住宅地計画における景観配慮のより合理的でより効果的な展開の必要性からはじめられた研究であることから、本研究の成果を実際のデザインにいかに対応し、展開していくかが今後の課題である。本研究で得られた成果は、実際のデザインの中でテストされ、そして、問題点は、改善されねばならないと考えている。